

あるカトリック信者の語りのプルリモーダル分析

一神の場所を表す表象的身振りに着目して一

狩野裕子(筑波大学大学院生・東京国際大学)

1. はじめに

「村神様」「宗教2世」という2つの言葉がトップ10入りした2022年の流行語大賞(自由国民社, 2022年12月1日)は、日本社会における宗教ディスコースの歪んだ構造を如実に反映している。それは、一方では、人為を超えた程度の甚だしさを宗教用語である「神」を用いてポップに語り、もう一方の現実態は「宗教」というヴェールで覆ったままにしておくというもので、そのいずれにおいても用語の本質は問われず、また語られない。「信仰」の不可視性に依存した空洞化したディスコースともいえるだろう。こうしたディスコースは、これまで宗教学、宗教社会学あるいは宗教人類学の範疇として扱われてきたが、本発表では、ディスコース研究の立場から言及指示内容の身振りを捉えることで部分的な可視化を試みたい。具体的には、あるカトリック信者の語りにみられた神の場所を表す身振りをとりあげ、その身振りが社会文化史的に浸透した「表象(emblem)」(Ekman, 1977)とは異なるものであることを示す。

2. 先行研究および本発表の位置付け

まず、本発表が依拠するプルリモーダルの分析概念は、Kataoka(2019)、片岡・武黒・榎本(2022)によって議論されてきた。その概念は、認知的かつミクロな相互行為分析を行うマルチモーダルの観点に加えて、身体動作に刷り込まれてきた社会文化史的な価値や実践への関心を特徴とし、前提となる文化的な知の解明を目指すものである(Kataoka, 2019; 武黒, 2022)。武黒(2022)は、石垣島のある地区の日常的な挨拶やナラティブに、日本語に支配的な奇数型ではなく、偶数型の詩的構造が用いられている点を指摘し、消滅危機に瀕する八重山語が偶数型の詩的構造を日本語に取り込む形で維持されていると考察する。こうしたヴァナキュラーな言葉とその詩的な実践が「身振り」や「型」を通して継承される可能性を挙げながら、「エスノグラフィーを通じてコミュニティに受け継がれるポエティクスを探ることは、それが人々の生活に浸透してきた歴史性、芸術性、道徳性を考えることでもある」(武黒, 2022, p. 242)と述べており、本発表もこうした視座にたつて、信仰者に受け継がれる実践を探るものである。

次に、本発表で注目する身振りに関して述べる。Ekman(1977)によれば、身振りのうちで発話内容と関わるのは、表象(emblem)、例示的動作(illustrator)、身体操作(body manipulations)の3つである(Ekman, 1977; 西尾, 2006)。喜多(2000)では、このうちの例示的動作をさらに、表象的身振り(representational gesture)とビート身振り(beat)に分類している。

本発表では上記の分類に従い、語りに表出された神との関係性を示す「表象(emblem)」(Ekman, 1977)と「表象的身振り(representational gesture)」(喜多, 2000)を取り上げる。表象とは、動作とその意味が社会文化的に広く浸透しているもので(西尾, 2006)、例えば、両手を開いて天を仰ぐ祈りの姿が挙げられる。もう1つの表象的身振りは、表象とは異なり、社会文化的に広く浸透しているとはいえないものの、「その形態(form)が、意味的な価値(semantic value)において、重要な役割を果たす動作」(Kita, 1993; 西尾, 2006)であるとされる。例えば、発話内容の形態、発話内容のイメージと同型である動作や、発話の参照対象を直接指示する動作が含まれるという(西尾, 2006)。

3. 対象データ

対象データは、2022年から2023年までに収集されたカトリック信者の信仰の語り(半構造化インタビュー)の録画および文字起こしデータで、そのうち表象と表象的身振りが対照的に示された2名(Makitaさん, Edaさん, どちらも仮名)の断片をとりあげる。いずれの身振りも、発話とともに自然発生的に産出され、発話内容に照らせば神の場所を表す身振りである。

協力者の募集は、都内のあるカトリック教会に協力を募るポスターを掲示してもらい、そこから雪だるま式に募った。また、筆者が参加したイベントで偶然一緒になった教会関係者の方にも協力をお願いし、関東近郊の6教会に所属する13名

から協力を得た¹。調査者と協力者は基本的には初対面で、調査は対面と ZOOM にて実施した。

以下に示す【断片 1】は、協力者 Makita さんとの ZOOM によるインタビューで、続く【断片 2】と【断片 3】は、協力者 Eda さんとの対面によるインタビューである。文字起こしの方法は、秦(2017)を参考にし、声の調子が変わる箇所には下線をひき、身振りは発話の下に二重括弧で記した。注目する発話と身振りはゴシック体にし、発話は太字にした。

4. Makita さんの語りのなかの表象と表象的身振り

協力者 Makita さんは、都内の G 教会に通う 60 代の女性で、信者だった母の影響から生後 3 ヶ月で洗礼を受けている。Makita さんはこの断片で、信仰のきっかけとなる Makita さんの母と神との関係性について語っている。まず、母と神の関係性を「仲良し」(03, 06 行目)で「友達」(07 行目)のようであったと語り、そうした関係性を示す事例として「お祈り」を挙げる(10 行目)。そこで、「お祈りって言ったらなんかお祈りって感じになっちゃう」といいながら、顔の前で両手を合わせる祈りの姿勢をとり、11 行目で「けど」を用いて、ここでいうお祈りが通常の意味でのお祈りとは異なる側面を持つことを示している。それは、両手を合わせてするお祈りではなく、「会話みたいな感じですね」(13 行目)といい、母と神の関係性は「近かった。ちかしかった」(18 行目)と話しながら、両手を向かい合わせて交互に回転させるような身振りをする。その後、しばらくしてから再び「すごく近く。接したい」(44 行目)と繰り返され、「こう仰ぎみるんじゃないくて」(48 行目)と両手を上方に広げて仰ぎみる身振りを繰り返し(50, 52 行目)それとは異なる存在として「本当こう。ここに。すぐ横にいてくださる。感じて:」(54-55 行目)と画面の左に作られた空間を指し示す。ここで、Makita さんの「お祈り」と「仰ぎみる」の身振りは、文化的に流通した前提的な知としての「祈り」の表象として表出されており、他方「会話みたいな」祈りの実践や、「ちかしい」「すぐ横にいてくださる」神の存在はそれとは異なる表象的身振りで表されているとみることができる。

4.1 【断片 1】すぐ横にいてくださる

- 01 Makita: あの。なんだろう。
02 (1.2)
03 Makita: 仲良しなんです。神様とうちの母は。
04 ずっと。
05 Kano : へ:::
06 Makita: すごく仲良しで:で-なんだろう。なんかこう
07 (もう) 友達のように。
08 なんか。よく
09 (0.5)
10 Makita: **ま。お祈りって言ったらなんかお祈りって**
(顔の前で両手を合わせる)
11 感じになっちゃうけど=
12 Kano : =うんうんうん
13 Makita: その。 **会話みたい。>な。【感じですねく。**
(両手を向かわせ交互に 2 回まわす)
14 Kano : [うん
15 Makita: たぶん=(何度も小さく頷く)
16 Kano : う:::ん
17 Makita: は::い。よく。う::ん。そうですね::
18 近かった。ちかしかったと思います。
19 Kano : は::
20 Makita: イエス様と母。(右手で Makita さんの左側
(画面右側)を指差す)
- 21~43 行省略 —————
- 44 Makita: **すごく近く。接したい**というか=
45 Kano : =はいはいはいはい。
46 Makita: うん。
47 (1.0)
48 Makita: **こう仰ぎみるんじゃないくて:: =**
(両手を上げて仰ぎみる身振りを 2 回)
49 Kano : =うんうんうんうん
50 Makita: イエス様であれ::マリア様であれ::
(両手を上げて仰ぎみる身振り))
51 Kano : うんうんうん
52 Makita: **上をこう仰ぎみるという感じではなく::=**
(両手を上げて仰ぎみる身振り))
53 Kano : =うんうんうん
54 Makita: **本当こう。ここに。すぐ横にいてくださる。**
(右側に手を向け、視線を画面に)
55 **感じて::=**
(右手を一回転させているようにみえる))

¹ 2024 年 8 月発行の『カトリック教会現勢』によれば、カトリック信者は全国に 41 万 2,330 人おり(この他、神学生や聖職者が 5,771 人いる)、全人口の約 0.33%を占める。5 年前(2018 年)の 43 万 4,111 人から 2 万人強の減少があり、今後も減少し続けるものとみられている。教会の高齢化は顕著で、調査に協力してくれた 50 代 60 代の方々も、教会の中では「若手」に位置付けられるといい、それぞれ教会の聖歌隊や朗読係、案内係、教会委員など主日のミサを支える仕事を引き受けられていた。一方で、外国籍のカトリック信者もまた全国に 40 万人以上いるとの見方もあり(寺尾, 2003; 谷, 2008)、近年の教会は、多文化共生の場としても注目を集めている(谷, 2008; 中西, 2016; 松本, 2023)。本調査が対象とする信仰の語りはしたがって、高齢化(中西, 2016)と多国籍化(谷, 2008; 松本, 2023)の変容の波間にある日本のカトリック教会の構成員の実践の一端を示すものとしても位置付けられる。

5. Eda さんの語りのなかの表象と表象的身振り

もう一人の協力者の Eda さんは、都内の C 教会所属のカトリック信者で、高校を卒業した翌年、19 歳の時に受洗している。ご家族のなかにカトリック信者は一人もなく、小学 5 年生のときに近所の友達に誘われてプロテスタントの教会に行ったことがきっかけとなり、そこから「マリア様への憧れ」を経て、高校生のときからカトリック教会に通い始めたという。受洗して何十年も経つものの、自分の信仰は「深くない」、「感情的」だと繰り返されていた。次の【断片 2】は、インタビューから 1 時間 30 分ほど経ったあたりで、祈りに際して、神をどう呼ぶのかという調査者の質問に続く語りである。

5.1 【断片 2】 いるんですよ。そこにすでに

| | | | |
|----|--------------------|----|--|
| 01 | Eda : 私::: .h° あの° | 09 | Eda : <u>あの. いるんですよ. そこにすでに</u> に (両手で大きく円を描く)) |
| 02 | (1.9) | 10 | Kano: [ん:::] |
| 03 | Eda : あ | 11 | Eda : [だから |
| 04 | (1.0) | 12 | <u>呼ぶっていうものでもないし</u> (左手で外を指し中, 外, 中に振る)) |
| 05 | Eda : 今日は嬉しかったんです | 13 | Kano: =>はいはい[はい< |
| 06 | (0.6) | 14 | Eda : [あの::: |
| 07 | Eda : で::も:: | | |
| 08 | (0.2) | | |

02, 04, 06 行目の 0.5 秒以上の沈黙からもわかる通り、Eda さんは、言葉を選ぶように慎重に祈りを再現しはじめる。「今日は嬉しかったんです」(05 行目)の発話後、「で::も::」とその発話を遮り、直後に調子を大きく変えて「あの. いるんですよ. そこにすでに」(09 行目)と、体の前の机の縁で組んでいた両手を大きく広げて上方に伸ばし、そこから外側にそれぞれの手で半円を描き、腕を下ろして全体で 1 つの円を描くような身振りをする。その後、筆者の相槌に重なるようにして「だから呼ぶっていうものでもないし」(11-12 行目)と言いながら、左手で外, 中, 外, 中と素早く小刻みに振る。調査者の「神をどのように呼ぶのか」という質問に対して、Eda さんは、祈りは「呼ぶ」というものではないと語っているのである。

注目したいのは、09 行目の「あの. いるんですよ. そこにすでに」で、「そこにすでに」の「そこ」で用いられている「ソ系」指示詞は、通常は聞き手の領域を指し示すとされるが、発話と同時に示される両手の動きは、聞き手近くの特定の場所を示すものではなく空間全体を指し示している。この発話と身振りによって、神は、宛先として名指す相手ではなく、Eda さんの空間を取り囲んで遍在的に存在する神として表されている。

次の【断片 3】は【断片 2】の続きで(13-14 行目重複)、ここでは、【断片 2】12 行目の「だから呼ぶっていうものでもないし」の発話を否定する形で、神を呼ぶことが例示される。

5.2 【断片 3】 かみさま

| | | |
|----|---|---|
| 13 | Kano: =>はいはい[はい< | (両手を胸の前で丸をつくるような) |
| 14 | Eda : [あの::: | 22 (0.4) |
| 15 | (3.3) | 23 Eda : ° あの:: ((両手を外に開く)) |
| 16 | Eda : ° うん. そうだ | 24 (0.5) ((両手を閉じる)) |
| 17 | (0.9) | 25 Eda : ° です° |
| 18 | Eda : <u>かみさま</u> っていうかんじで呼ぶときも (視線を上) (視線は机の真ん中へ) | 26 (0.5) |
| 19 | あるかもしれないですけど=((視線 KANO に)) | 27 Eda : <u>そばにいてもらえ</u> るとそれはありますね |
| 20 | Kano: =う:::ん= (大きく頷く)) | 28 ° う::ん° = ((視線は KANO に)) |
| 21 | Eda : = (° あの°) 常にもう | 29 Kano: =それはその歩いている時とか自転車に乗られて 30 [いる時 (とかXXXX) |
| | | 31 Eda : [ありますね. それはありますよ. う::ん |

18 行目の「かみさまっていうかんじで呼ぶときもあるかもしれないですけど」で「かみさま」と発話する際には、視線を上の方に向けており、神は「かみさま」という呼びかけの宛先として、上方のある特定の空間に位置づけられる存在として表出される。そのあと、「(° あの°) 常にもうあの:: ° です°」(21-25 行目まで)は、間を伴って発話されており、両手で胸の前で丸をつくるような身振りから、その両手を外に開いたのちに、手をもとの机の縁におさめなおしている。この一連の身振りは、「かみさま」と上方を見つめるものとは異なり、【断片 2】の 09 行目「あの. いるんですよ. そこに

すでに」で示された遍在的な神を再び表出しているようにみえる。

上記の【断片2】と【断片3】では、神の存在は2つの異なる身振りで示されていた。宛先となる「かみさま」(【断片3】18行目)は上方の特定の空間に位置する神として、一方の「いるんですよ、そこに」(【断片2】09行目)、「そばにいてももらえる」(【断片3】27行目)で言及される神は、限定化されない空間に存在する神として示されていた。前者は、社会文化的に流通された上方の神の表象として、後者はEdaさんと神との個別の関係性を示す表象的身振りともみることができる。

6. 考察

MakitaさんとEdaさんは、社会文化的に浸透した信仰対象や祈りの身体動作の表象を理解しながらも、それとは異なる個別的神との関係性、神の場所性を身体化していた。それは、上方に位置する神ではなく、「ここに、すぐ横にいてくださる」神であり(Makitaさん)、また「そこにすでに」いる神であった(Edaさん)。以上により本発表は、カトリック信者の信仰の実践において、歴史的かつ文化的な表象レベルの「型」が受け継がれながらも、表象的身振りのレベルでは個別の「型」の身体化がなされている点を指摘したい。こうした神についての表象的身振りは、ミサなどを通して表出される神とは異なり、MakitaさんとEdaさんがそれぞれに神との対話を深めるなかで身体化していったものと考えられる。神の場所や存在の把握については、信者同士でも話題にのぼらないことが多く、その意味で隠れた実践でありながら、信仰実践の本質を支えるものである。このように、プルリモーダル分析の視点から信仰の語り的身振りを検討することで、「宗教」と曖昧に語られるディスコースを少しずつ見えるものにできるのではないだろうか。

謝辞 調査にご協力いただいた皆さまに心から御礼申し上げます。また、本稿の執筆にあたって筑波大学大学院の井出里咲子先生はじめ院ゼミの皆さま、東京大学の高山春花先生、東京国際大学の酒井晴香先生から有益なコメントを頂きました。ここに感謝します。本研究は、JST次世代研究者挑戦的研究プログラムJPMJSP2124の支援を受けたものです。

参考文献

- Ekman, Paul. (1977). Biological and cultural contributions to body and facial movement, In John Blacking (Ed.), *The anthropology of the body*. London: Academic Press. pp.39-94.
- 秦かおり (2017). 「みんな同じがみんないい」を解読する—ナラティブにみる不一致調整機能についての一考察 鈴木亮子・秦かおり・横森大輔(編) 話しことばへのアプローチ—創発的・学際的談話研究への新たな挑戦— ひつじ書房 pp.217-248.
- Kataoka, Kuniyoshi. (2019). Poetics through Body and Soul: A Plurimodal Approach JALA, *The Journal of Asian Linguistic Anthropology* 1(1), 35-45. <https://jala.pub/v1-i1-a3/>
- 片岡邦好・武黒麻紀子・榎本剛士 (2022). はしがき 片岡邦好・武黒麻紀子・榎本剛士(編) ポエティクスの新展開—プルリモーダルな実践の詩的解釈に向けて ひつじ書房 pp.iii-xiii.
- Kita, Sotaro. (1993). Language and thought interface: A study of spontaneous gestures and Japanese mimetics. Unpublished Ph. D. dissertation, University of Chicago.
- 喜多壮太郎 (2000). ひとつはなぜジェスチャーをするのか 認知科学, 7(1), 9-21.
- 松本美香子 (2023). 外国人信徒のまなざしによる教会生活の機能と言語使用—カトリック教会における「三層構造」分析 早稲田日本語教育学, 35, 163-172.
- 中西尋子 (2016). 結婚移民のフィリピン人女性の増加とカトリック教会 移民研究, 11, 69-80.
- 西尾新 (2006). 発話にともなう身振りの機能 風間書房.
- 武黒麻紀子 (2022). 島の祭りのポエティクス—周縁島嶼域における詩的構築の多様性 片岡邦好・武黒麻紀子・榎本剛士(編) ポエティクスの新展開—プルリモーダルな実践の詩的解釈に向けて ひつじ書房 pp.219-247.
- 谷大二 (2008). 移住者と共に生きる教会 女子パウロ会.
- 寺尾寿芳 (2003). カトリック教会共同体の多文化主義的マネジメント: 現代日本における可能性 (〈特集〉「生活の宗教」としてのキリスト教) 宗教研究, 77(2), 369-391.

参考資料

- 自由国民社 (2022年12月1日) 「第39回 2022年 授賞語」 <https://www.jiyu.co.jp/singo/index.php?eid=00039> (2024年12月15日確認)
- カトリック中央協議会司教協議会事務局広報課 (2024年8月) 「2023 カトリック教会現勢」 <https://www.cbcj.catholic.jp/wp-content/uploads/2024/09/statistics2023.pdf> (2024年12月15日確認)